

教材教具の工夫

1995年5月15日

障害児基礎教育研究所 所長 水口 俊

- 1 可能性を信じ、できる課題から始め、人間関係（相互交渉）の成立をはかり、相互交渉の過程で、学習を深め、達成感と自信と自発を呼び起こし、共成の場を作り、信頼関係につなぐ工夫をする。
- 2 障害の程度、特性によっては、反応が速く、教具の提示が間に合わないことがよくある。このことは、本人の学習のペースが速いのであるから、前もって教具を準備し、本人のペースに合わせて相互交渉を活発にした方がよい。そして、徐々に傾合いを見計らって、よく見つめる、手に触って確かめる等して、比較・弁別・選択・分類・分解・構成等の操作的な知的学習につなげる工夫をする。
- 3 学習は、発達の段階に合わせてわかりやすい順に系統的に課題を提示し、失敗がないように留意し、応用問題は、予測可能になってから提示した方がよい。失敗は、自身を失うばかりでなく、混乱を引き起こすことがある。
- 4 学習は、確実にできるように工夫し続けることが大切である。そして、日常生活のレベルアップにつながるように工夫する。そのためには、手や目の使い方をよく観察し、たとえば、△を学習する場合、位置・方向・順序が操作的に理解できるように工夫する。また、単語の学習でも、事物や動作に結びついた生きた言葉を身につけることが大切である。
- 5 やらせにならないように、細心の注意を払う。やらせ（強制的な指示・命令）は、人間の尊厳にも関わり、拒否か自閉になるからである。学習の原点である自発が起きなくなるからである。そのためには、①予測可能な教具、②単純明快な目的を持った教具、③操作性に富んだ教具、④興味・関心に富んだ教具、⑤応答性に富んだ教具等の工夫から始めた方がよい。
- 6 新しい教具には誰でも興味を示す。知的好奇心が高いからである。新しい教具は、新しい出会いのきっかけとなることが多い。
- 7 同じ学習内容を繰り返し強化する時、同じ教具を使うと飽きられることがある。そんな時は、速やかに中止して、同じ学習内容を埋め込んだ新しい教具を工夫・作成した方がよい。工夫できない時は、色を塗り替えるだけでも興味を示すことがよくある。
- 8 学習中の声かけや手出しは禁物である。ヒントも与えない方がよい。本人が自力で工夫をこらしている時に中断することになると、取り返しがつかなくなることがある。その人の尊厳を傷つけることにもなりかねない。もし、援助の要求があれば、自尊心を傷つけないよう、最低のヒントを工夫する。学習中は、じっくり間をとって解決で

きるまで待つことが大切である。学習するのは本人自身であるから。

- 9 教具を提示する時大切なことは、教具は言語の代わりをするものであるから、言葉による働きかけは最小限にとどめた方がよい。特に、概念形成の途上にある表出言語も理解言語も少ない人に対しては、少ない程よい。どうしても言葉かけが必要な場合は、ていねいに事物や動作に言葉をのせてわかりやすく働きかけた方がよい。
人によっては、見本動作だけで通じる時がある。
- 10 課題提示については、直接机上に提示するよりも、机上に学習用の底の浅い箱（学習用枠）の中に提示した方が課題が枠内に限定されるだけにはっきりしてわかりやすくなる。また、課題によっては、相手の手のひらの皮膚に直接のせて提示した方がはるかに課題として伝わりやすい。手はもともと主体的な感覚機能であるからであろう。
- 11 手をとってガイドする時は、本人が主体的に学習できるように工夫する。たとえば、手指の使い方をガイドする時は、手指を持って直接働きかけることはできるだけ避け、軽く肘や腕に働きかけて工夫する。ガイドの位置は後方がよい。
- 12 確実に伝えたい時、文字が読めるようになったら、文章を通して働きかけた方が効果が上がることがある。ひとつは、文字を読むことそのことが主体的な行動であること、ふたつめは、文字を読む視覚と聴覚を使うから確実性が生じるからである。逆に、音声言語だけによる働きかけは、形として残らず、記憶も消えやすいからである。
- 13 働きかけを失敗した時は、直ちに仮説を立て直し、別の課題に切り替えた方がよい。
そのためには、仮説となる教具は、多いほどよい。それでも失敗したら、改めて子どもに学び、教材教具を工夫する。障害は、教える側も教わる側も相互支援状況にあるからである。
- 14 視線は、同じ高さより低い方がよい。特に人間関係が成立しにくい人に対しては、低い方がよい。人によっては、合わせない方がよい。相互交渉が進み、人間関係が成立し、信頼関係が芽生えてくると、自然に相手の方から合わせるものである。
- 15 どんなに働きかけに応じない人でも、心をこめて可能性を信じ続け、ねばり強く教材教具を工夫していけば、やがては生き生きと学習に取り組むものである。そのためには、初心に帰って能力・興味・関心・特性に合わせて工夫し続ける。
- 16 教材は、着色した方がよい。色が眼球全体の内的欲求を満たすと同時に、視機能の感覚と運動を呼び起こす働きがある。そのように、色は発信源ともなり、①探す・注視・追視・比較等の学習がしやすくなり、②教具の予測も立てやすくなり、③手と目の協応や操作的学習により、結びつけることが容易となる。
- 17 課題が解決できたら心をこめてタイミングよく誉め、発見や成功の喜びを共有する。
初期の学習では、何がどのように解決できたかを子どもにわかるように援助する。
また、成功発見の喜びは、自然に胸にこみ上げてくるものである。学習を支援する側は、その喜びを静かに子どもと共有する。